

悲鳴嶼行冥が少し救わ
れたら

ガンダムハンマー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悲鳴嶼行冥があれほどまでに誰かを信じられなくなってしまったのは、信じた子供全てに裏切られたから。

もし、悲鳴嶼行冥の振るった拳が少しでも報われたら。

原作既読推奨

もし行冥が救われていたならという原作改変ものです。
ゆっくりとですが進められたらと思っております。

感想・評価お待ちしております。

作者の燃料になります。

目次

第壹話 襲来

1

第壹話 襲来

怖かった。

ただ自分の心を埋める感情は『恐怖』という生物が原初から持つ一つの本能。

目の前で繰り広げられる惨状、無残にも食い散らかされたとしか表現できない殺され方をされた自分たちの家族、そして家族をそんな目に合わせた異形。そして

人でありながら、その異形を一方的に殴り続ける父親の姿悲鳴喚行冥があった。

数刻前

私の名は紗代^{さよ}。親はいない。自分が今よりも小さいときに、死んでしまったそうだが、なので、親の顔はわからない。でも、私にとって父と呼べる存在、そして家族と呼べる存在がいる。

悲鳴嶼行冥、彼こそが私にとって、いや私たちにとって父のような存在だ。この時代において珍しい高身長、そして肉付きはよいとは言えないがしっかりした体。特質する点は彼は目が見えていないという点だ。

彼は身寄りのない子供を自分の寺で引き取って育てていた。

盲目であるが故かはわからないが、行冥は人の外見ではなく心、内面をみて接する。心から子供たちを理解しようとし、お互いを信頼していた。だからこそ、みんな血は繋がっていかなかったが互いを助け合い、行冥が父、そしてほかの引き取られた子供たちが兄弟姉妹として。本物の家族のように暮らしていた。

この家の思い出は、藤の香りとともにあった。いつも寺の周りに藤の花の香が焚かれていたからだ。疑問に思った私は行冥に聞いてみたのだ。

月のない夜だった。寺に住む者が一人、日が暮れても帰ってこないことで多少慌てた雰囲気だったが、そんな中でも行冥はいつも通りお香を焚いていた。そのタイミングで思い切って聞いてみた。

「なんでいつもお香なんて焚くの？」

余りしやべらない性格だとは自他認めていた。なので、行冥は自分の意志で言葉を話してくれた私をうれしそうな表情とともに返事をした。

「ちゃんと理由があるのだ、紗代」

そうして行冥が話してくれた内容は、昔ばなしみたいだった。

昔々、人を食ってしまう鬼がいました。

それは村の人が全員いなくなってしまうほど、鬼に食べられてしまいました。

そしてついに、高名な剣士様が村で死んでしまった人々のために立ち上がりました。

剣士様は、不思議と光る刀と、藤の花で鬼を退治しました。

そんな話だった。

村の人が食べられてしまう話の下りで、泣きそうになってしまったが、山仕事で凸凹になってしまった行冥の手が私をなでてくれた。

「その村がこの辺りにあつたらしい。だから、鬼が来ないようにこの藤の花のお香を焚くのだ」

藤の花のお香を焚くにはちゃんと理由があつたのか。そう思い、先ほど聞かされた昔話を思い出し、ぶるりと体を震わせる。

また頭をなでられる。

「さあ、鬼が来ないうちに部屋に戻ろう。もう晩御飯もできている」

そういつて寺の中に戻る私、続いて立ち上がった行冥の顔をみやる。

いまだに返つてこない少年、かいがく 獺岳を心配するように、寺の周りに広がる森の方を向く。

「私、あの人嫌い」

「そんなことは言つてはいけない」

獺岳はとても自己中心的な少年だった。ほかの子供たちよりも体が成長しており、力があり、年上という立場からさんざん偉そうに威張り散らしていたせいだ。いじめっ子は、いじめた相手の反応を楽しむとはよく言ったもので、特に話すような性格ではない私の反応は面白くなかつたようで、私が狙われるようなことはなかつた。

あんな男でさえ受け入れている行冥はやはりすごいな、そんなことを考えながら寺の中に入つていった。

そうして、晩御飯を喰岳のいないまま食べ進めていた時。藤の花の香りが消えた。

ちようど行冥は、一番下の子が晩御飯のおかず、品のことで駄々をこねており、藤の花の香が消えてしまっていることに気が付いていないようだった。

(どうしよう、伝えた方がいいのかな)

先ほど聞いた昔話のせいで、たかがお香の香りが消えただけだったが、どうしようもなく不安になった。

毎日お香を焚いていたのだ。もしかしたら本当に鬼がやってくるかもしれない。

行冥に伝えよう。

そう決心して駄々っ子につきつきりになっている行冥に伝えようとしたとき

ドゴオ!!

雷が落ちたような大きな音とともに寺の扉が吹き飛んだ。

あまりの出来事に、声を上げることすらできなかつた。

そして、破壊された扉のあつた出入り口のふちに、鋭い爪の生えた手がかけられた。

「ひう………」

無意識に声が漏れていた。何かのどを塞いでしまったようで、いつも通りの呼吸ができない。頭がくらくらする。

四人が真つ先にのどを噛み千切られて死んだ。

異常を察知した行冥が、私たちの前に立ち、庇うように手を広げた。

漂う血の匂いから、既に手遅れだったことを悟り、血がにじむ程手のひらを握り締めた。

これが鬼なのだと思感で感じた。

初めて対面する『死』という状況を直視する。

全身の血が凍り付いたと錯覚するほどの寒気に襲われた。

行冥の肩越しに見えたそれは、異形だった。

行冥よりもはるかに大きい肉体。絵物語に語られるような見開かれた鋭い目、轟々と燃える炎のように不自然に揺れる髪。そして極めつけは、頭部から生える一對の角。

「こんなに楽に入れるとはなあ。あの小僧のおかげだぜ」

「小僧?」

いきなり子供を殺されたというショックも当然あるが、目の前の化生が何と言っているのかわからなかった。

「あのガラの悪そうな小僧だお、お前の子供だろう?」

獺岳のことだ。

「最近はめつきり飯人前が手に入らなくてなあ……………ここには前から目を付けていたんだぜ。ただな」

そこで行冥も、藤の花のお香が消えていることに気が付いた。まさか、と顔をこわばらせる。

「このにおいが大っ嫌いだな、全く近づくこともできなかつたわけだ」

「確かに私は今日も香を焚いたはず……………まさか!」

そこで私もあることに気が付いてしまった。

『こんな楽に入れるとはなあ。あの小僧のおかげだぜ』

そしていまだに姿を見せない男児、獺岳。

「あの小僧、殺して喰ってやろうかと思つたんだがな、顔面涙と鼻水でぐしゃぐしゃにして俺に『寺にいる九人の人間を喰わせる代わりに、俺だけは殺さないでくれ』って言っ

てきたわけだ。ハツハツハツハ、これを笑わずにいられるか人間。息子に裏切られ、今から殺されるってのはどんな気持ちだ？」

よほど面白かったのか、腹を抱える鬼。

その話を聞き目の前の状況が現実であると正しく認識した私たち。ついに我慢ができなくなり、恐慌状態に陥った私以外の三人の子供が寺から逃げ出そうと立ち上がり、走り出した。

「お前たち、待て!!」

「逃がさねえよ」

行冥の言いつけを守らず進む三人。鬼はその一言とともにその姿を暗闇に紛れさせる。

何処に行ったのか、行冥が見失ったその瞬間に窓から、玄関から逃げ出そうとした三人は喉を掻き切られて絶命した。

当然だ。目も見えない、身長、体の置き差に見合わない細い体。そんな人物が自分たちを守ることはできないのだと子供たちは判断したのだ。その結果、私と行冥^父以外の家族はみんなこの短い時間で死んでしまった。

私は、腰が抜けてしまっていたのか、それとも行冥を信じたのかはわからないが、彼の背中^の後ろに居続けた。

「さて、あとはお前たちだけだな。安心しろよ、すぐにあいつらに合わせてやるからな」
「さて、獺岳は、お前のいう小僧はどうした？」

「あ？殺したよ。ただ、俺に飯を提供してくれたからな、すぐには殺さなかつたさ。腹を
思いつきり裂いてやったよ。夜明けと同時に死ぬんじゃないか？まあ、別に一
人はいなくらいどうってことないぜ、なんせここにはこんなにも飯があるんだからな」
その一言で、行冥の雰囲気が一瞬の間変わった。

私も殺されるんだ、

そうつぶやき瞼を閉じた。

結局のところ、私も盲目であり頑丈でない体の行冥が本当に私を守ってくれるとは信
じ切れていなかったのだ。

ギシ

寺の床がきしむ音がする。

「さあ、お前たちはどう殺してやろうかな」

また一步、一步。玄関先にいた鬼はどんどんと私たちに近づいてくる。

ああ、殺されるんだ。そう思い一層強く瞼を閉じる。しかし、切り裂かれる痛みは

終わるのだ。

太陽が顔を出し、その光が行冥と鬼を照らす。

「グワアアアアアアアアアアアアアアア、あ、熱い、篤い暑いアツイイイイイイイ!!」

どこにそんなに叫ぶ力が残っていたのかと思うほどの雄たけびを上げ、鬼は灰になつて消滅した。

私と行冥に残されたのは、どうしようもない絶望感、そして消すことができない心の傷だけ。

壊れた絡繰りからくりのように意味をなさない言葉を吐き続ける行冥の背中に縋り付き、大声で泣いた。